廣瀬量平
フルートオーケストラ三部作楽譜出版記念・没後10周年

東京フルートアンサンブル・アカデミー 創設45周年
メモリアルコンサート

Tokyo Flute Ensemble Academy

©廣瀬量平・事務所

指揮：青木 明・播 博

［出演者］
播 博，青木明，植村泰一，野口龍
佐伯隆夫，佐野悦郎，中野真理，三上明子
高久進，崎谷直，崎谷美知恵，野口文子
前田有文子，古田土勝市，大石三郎
永井由比，小林みのり，都村慶子
清水理恵，菊池カナエ，本田幸治
渡辺かや（ハープ），廣野嗣雄（オルガン）

※出演者は予告なく変更になる場合がございます。予めご了承ください。

東京フルートアンサンブル・アカデミーと廣瀬量平

Program

マリンシティ（1980）
フィガロの楽しき時代（1991）
パピヨン（1980）
パーラミターとカーダ（1980）
Alto-flute Solo 野口龍
リスと踊るコロポックル（1998）
森のコロポックル（1996）
1st.Picc.Solo 高久進　2nd.Picc.Solo 本田幸治
リチュアルダンス 典礼風舞曲「雨乞い」（1988）
午後のパストラル［編曲:山上友佳子］（1985/2018）
Flute Solo 三上明子
《朝のセレナーデ》より 第一楽章（2003）
＜甘き死よ来たれ＞
J.S.バッハの旋律による前奏曲、フーガ、終曲（1994/1995）
Organ 広野嗣雄

2018 11/11（日）13:30開演（13:00開場）
上野学園 石橋メモリアルホール
※ホールには駐輪場・駐車場はございません。予めご了承ください。

入場料：全自由席
一般 4,000円（フルート協会会員3,500円）学生 3,000円
［チケット取り扱い］●プロアルテムジケ 03-3943-6677 www.proarte.jp
●首都圏各楽器店

主催：東京フルートアンサンブル・アカデミー
後援：一般社団法人 日本フルート協会　協賛：株式会社 龍角散
協力：株式会社 音楽之友社、ザ・フルート編集部、廣瀬量平・事務所
マネジメント・お問合せ：プロ アルテ ムジケ
TEL. 03-3943-6677　www.proarte.jp　info@proarte.co.jp

廣瀬 量平（1930-2008）

©廣瀬量平・事務所

多くのフルーティストを輩出する函館生まれ。生家は市内老舗レストランの「五島軒」。5人弟妹の長男。幼少期、叔母にピアノを習うものの型どおりのレッスンは嫌い、しかしコッソリさぐり弾く和音が、響いたり響かなかったりする不思議に魅せられたという。いつかその謎を解きたいと思っていた。小学校は市内の柏野小学校で、播博が四年下で同窓。年代は下がるが清水信貴も同校の卒業。阿部博光も同市出身である。

その後北海道大学予科に入学後終戦。新制大学一期生として教育学部に編入するが、この時の学部長、教育学者城戸幡太郎の「教育の原点は音楽である」との言葉に背中を押され、作曲を志す。後に札幌交響楽団初代指揮者になるドイツ帰朝の荒谷正雄が主宰する札幌音楽院に入門。教会併設の下宿に入り、讃美歌にも接し洗礼も受けている。荒谷からはドイツ（音楽）理論を学んだ。

北大を卒業し上京。池内友次郎に師事。一浪の後東京藝大作曲科に入学。一年先輩に山本直純、フジ子ヘミングがいる。フランス新帰朝の池内からは最新の和声法・対位法理論（フランス理論・エクリチュール）を高いレベルで学び取ることを厳命され、一時期作曲も禁じられた。廣瀬の職人的な技術はこの時に培われたが、幼少期の謎が解けていく喜びを感じた。その後専攻科に進学、1963年に修了。この前後から商業的作曲をはじめ、スタジオミュージシャンと接するうち、青木明や野口龍等とも邂逅したという。締め切りに間に合わなかった廣瀬が慌てて作曲する隣で、青木が代わって指揮をすることもあった。次第に委嘱を受けるようになり、最初期の委嘱作「フルートとチェンバロのためのソナタ」（1964）の初演は野口龍であり、その後も廣瀬フルート作品の立役者となる。

修業時代は徹底的に洋楽だったが、邦楽奏者との出会いが繁く、洋楽技法の熟達者であり洞察者であった廣瀬が邦楽に接することで、尺八に見られるような「息吹」「息づかい」に内なる声や精神性、霊性を見いだし、日本人とは日本とは、さらに東洋・西欧とはという視点から洋楽を見つめ直し、ローカル・グローバルとは、という大きなテーマに踏み出すことになる。これは同様に「息」の楽器、フルートやリコーダーそして尺八作品へと連なり、重要作品群を成した。殊にフルートでは、メロディーメーカーであった廣瀬が職人技のように硬軟自在、調性非調性に限らず幅広い作品を作った。こうした息吹や息づかいから声、歌、精神性、さらには東洋・西欧性への洞察が、廣瀬の三大協奏曲と言われる「尺八協奏曲」はもちろん、「チェロ協奏曲」「ヴァイオリン協奏曲」に昇華し、それは合唱まで及び、尾高賞ほか芸術祭大賞受賞などの大きな評価を得ることになる。芸術祭優秀賞、芸術作品賞は数知れず、古典化した作品も多い。

尾高賞を得た1977年より京都芸大作曲科教授に招聘され、その後音楽学部長。さらに同大伝統音楽研究センターの提唱者にして初代所長。2008年11月24日、京都コンサートホールの館長在職時に没す。78歳。紫綬褒章、旭日小綬章。函館市栄誉賞、京都府文化賞特別功労賞、京都市文化特別功労者賞。

東京フルートアンサンブル・アカデミーと廣瀬量平

1974年に創設。武蔵野音大フルート科で教鞭を執っていた、播博、植村泰一、斉藤賀雄、佐伯隆夫、佐野悦郎、青木明らが、学生たちを批評するばかりではなく、我々もアンサンブルをやろうと、さらに共通の友人であった野口龍、気心のあった仲間や門下生（崎谷直、崎谷美知恵、清水信貴、高久進、三上明子、阿南文子、小林みのり、前田有文子、加藤千香子）で立ち上げたのが、東京フルートアンサンブル・アカデミーである。当初は小編成で演奏していたが、多くのメンバーが参加できる編成の曲が少なく、モーツァルトのディベルティメントを播博が、ロッシーニのソナタを青木明が編曲していた。そこで行き当たったのが、「フルートオーケストラ」という言葉をはじめて使ったケシック（当時、伊ミラノ音楽院のフルート科教授）の「祭（Fiesta）」という曲であり、これを12人でアンコール演奏したのが最初の「フルートオーケストラ」演奏となる。そして団長の播博がこの時の演奏テープを持って廣瀬を訪れ、委嘱している。既に少なくないメンバーとは個別の交流があって、この訪問はごく自然なものだったようだ。廣瀬は当時こう語っている。

「フルートだけのアンサンブルの音の美しさに驚いた。特に透明なハーモニーはすばらしい。これまでフルートを旋律楽器とだけ考えてきた私には、フルートだけのハーモニーがこんなによく響くのをはじめて知った。名手が集う東京フルートアンサンブル・アカデミーの演奏を聞いてのことである。」そして作曲されたのが、「ブルートレイン」（1979）であり、親しみやすいリズムとメロディなのに新鮮な音響と、旅情を映し出すこの曲は、二度のアンコールを伴うセンセーショナルな成功をおさめた。以来、比類のないサウンドは世界でも注目を浴び、この曲も編成も世界に広がり、今では古典とされる。これを演奏したいがためのフルート入門者は多い。

二作目「マリンシティ」三作目「パピヨン」と成功は続き、ヨーロッパ演奏旅行に向けて作られた、仏教的楽想と東洋的音響を持つ「パーラミターとカーダ」では、西欧人にも熱く迎えられた。その後アカデミーはオーストラリア、アメリカ、ヨーロッパなど数度の演奏旅行を行い、大成功を収めている。ほか、廣瀬のフルートオーケストラ作品は編曲も含めて20作を越えるが、その多くに委嘱役もしくは相談役として、遅筆で有名な廣瀬を励ましアドバイスした、畏友青木明とアカデミーの演奏力によるところが大きい。さらにフルート製作家でもある古田土勝市の手になる超低音バスフルートの開発は、作曲の前提になっていた。そうした名手揃いのアカデミーが演奏するから、というのが作曲のモチベーションだった。しかし、時には遅れに遅れ、アメリカに向かう飛行機の中で新作の練習をし、青木は指揮の難しさに、旅先で知恵熱に倒れたという。

団長の播博は、2011年8月に開かれた没後3年記念演奏会に向けて、出演者への呼びかけにこう書いている。

「質、量とも他の作曲家の追随を許さない廣瀬氏の作品は、現在では想像を絶する程の偉大な作品を数えます。フルートオーケストラの『Bach』、クーラウが『フルートのベートーヴェン』と云われたように、『フルートの神様』と云う言葉を、アカデミーから贈りたいと思います。」

記：廣瀬量平・事務所　廣瀬周平